ペケレベツ

2017年1月
Vol. 4

九十九里浜　初日の出

（提供）日本赤十字社　医療事業推進本部
経営企画部次長　尾崎　耕路様

理　念

私たちは、赤十字の理想とする人道・博愛の精神にもとづいて、よりよい医療を提供し、皆様に信頼される病院をめざしています。

基本方針

1．地域医療の推進と救急医療の充実に努めます。
2．患者様の権利を守り、その意思を尊重した医療を行います。
3．地域の皆様の健康増進と疾病予防に努めます。
4．清潔、快適で、やすらぎのある環境づくりに努めます。
5．常に研鑽を重ね、資質・技術の向上に努めます。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society
清水赤十字病院
〒089-0195
北海道上川郡清水町南2条2丁目
TEL0156-62-2513
URL http://www.shimizu.jrc.or.jp/

“春の訪れを感じて”

病院長　**藤城　貴教**

この一月、超大国アメリカでは民主党から共和党に政権が交代し、ドイツ系移民のビジネスマンが大統領に就任した。アメリカ合衆国は世界中の移民が作った夢の国であることが今更ながら実感される。前オバマ政権は核のない世界を目指し、長らく断交していたキューバと国交を回復したばかりだが、現政権は逆に移民制限をはじめ”アメリカファースト”というスローガンのもとレイシズム、ポピュリズムに走っている。歴史は繰り返すというが、19世紀前半のモンロー主義を彷彿とさせる。

本来、純血主義や保護主義というものは内向的であり、さほどの発展性もないように感ずる、多様性の認容と多様性の中の調和と統一こそが国家民族の発展に寄与すると考えるが、これは国家のみならず、どの組織でも同じである。”多様性の中の統一”を国是とするインドネシアに居心地の良さを感ずるのは果たして私だけであろうか？

近年、日本では未曽有の速さで少子高齢化が進みますます人口は減っていく。地方は過疎化により衰退し地域経済は冷え込み、生活圏はますますモザイク化していく。これは果たしてピンチなのであろうかチャンスなのであろうか？私はチャンスとみている。なぜなら、我々の医療圏にはもともと高齢者が多く、当院の高齢者、認知症医療は他院より一日の長があると考えている、しかも厚生労働省の医療政策は”地域包括ケアシステムの”もと、在宅医療や高齢者医療に多くのインセンティブを設けている。当院の利用者は多種多様で神経難病や悪性腫瘍から、ごく一般的な疾患まで幅広く、国籍や人種も違う人達がしばしば受診するため、当然のことながら我々の業務もこのような臨床業務から災害救護まで多様性に富んでいる。医師も専門はそれぞれ違うが知恵を絞り、チームを作って日常診療をこなしている。

つまり、期せずして”日本の国が目指す医療”を実践するためのマテリアルとツールとコンセプトは既に我々は持ち合わせているのである。そこで、このピンチをチャンスに変える方法は何であろうか？私なりの答えは、”先を見る目”と“組織および職員個々のスキルアップと仕事率を上げる”ことである。昨年は当院も台風被害に見舞われたものの、全職員の結束によりこの危機を乗り越えることが出来た。医療と救護活動を同時に提供し、これまで訓練してきたことを実践にうつす力、事態の先を見る眼力を実証できたものと考えている。

新年一月より当院でも”地域包括ケア病棟”が2室8床で始まったが、これまで高い病床利用率を維持し、組織としての仕事率は向上しつつある。そして、診療報酬改定という負の波にのまれることなく医療の荒波を航海している。しかし、もしTPPが始まればその荒波に乗って日本の医療を狙う黒船がやってくることは想像に難くなく、更なる医療経営基盤の強化が求められるのである。

ここ数週間で雪解けも進み、季節の移り変わりとともに当院も着実に春へと向かっている、職員の皆さんには自信と勇気をもって直面する課題に取り組んでほしいと願うばかりである。

“私たちが抱える問題は、人間が作り出したものだ。したがって、人間が解決できる。“　J・F・ケネディ

「職員の総力を挙げて」

事務部長　**林　　裕一**

昨年は清水町や周辺の町々に台風が直撃し大きな被害をもたらしました。年末には鳥インフルエンザにまで見舞われました。

「北海道には台風は来ない、来たとしても寒い地まで来ると台風の勢力が弱くなるから問題ない…」

まことしやかなこのような話、私も耳にしたことがありますが、それは一度や二度ではありません。

私も油断をしていた一人かもしれません。油断は禁物ということを学んだ年でもありました。今年は災害のない平和な一年であってほしいものです。

さて、今年は団塊の世代が後期高齢者となる2025年（問題）に向けて当院でも大きく舵を切る年となります。念願の「地域包括ケア病床（８床）」が運用スタートの運びとなりました。

そもそもは2013年８月「社会保障制度改革国民会議報告書」において示された今後必要とされる医療提供体制であり「医療・介護が必要な状態になっても、できるだけ長く住み慣れた地域で暮らせるように」とする地域包括ケアシステムの概念に沿うものであります。

当院が将来へ向けて発展していくための基礎となる取り組みでもあると確信いたします。

病院を取り巻く情勢、環境は目まぐるしい早さ、かつ大きく変化し、病院自身が変革していくことが求められています。これに追いついていけなければ存在意義が薄れるばかりか、存続が危うくなるといっても過言ではないものと思われます。

自然、豊穣に恵まれ、ふだんはのどかな時が刻まれる清水の大地にも、地域医療構想「機能分化と医療連携」の波（激流）が間違いなく押し寄せてきています。

地域医療を守り続けるため、今度は油断することなく、職員が力を合わせてしっかり立ち向かっていきたいものです。

「災害活動を踏まえた看護提供を」

看護部長　**佐藤美恵子**

2017年は、穏やかな年始となり、晴れ渡る青空が広がるすがすがしい心持と、肌を刺す冷気に身の引き締まる思いです。

昨年を振り返りますと、日本赤十字社の発祥の地である熊本の震災に始まり、鳥取、福島、茨城と大きな地震が続き、年末には、鳥インフルエンザの流行、糸井川の大規模火災が起こり、赤十字としての活動が日本全国で広く行われた一年となりました。

また、台風による被害が少ないと言われていた東北・北海道でも度重なる台風により、過去に経験したことのない甚大な被害に見舞われ、清水町でも台風10号により大きな被害を受ける事になりました。

当院では、熊本大震災においては、心のケア班としての看護師を含む病院職員の派遣や病院支援へ看護師を初動から派遣する機会を得る事が出来、赤十字の職員として、赤十字人としてあるべき姿を学ぶ事ができました。

この経験が、地元清水における台風10号の水害で活かされ、災害発生直後より、救護活動が終結するまで病院あげての救護活動を行う事ができました。

救護活動を実際に行った職員と救護活動を支え続けた職員の活躍から赤十字職員としての一体感を強く感じた一年でした。そのような活動の中で、多くの学びや課題などが明確にすることができ、今年度に向けての取り組みへと移行しています。

今年度は、病院全体の取り組みとして職員のレベル向上を目指し、各部門との協力のもと、さまざまな研修の実施、支援に取り組んで行きたいと考えております。

また、１月より、地域包括ケア病床が導入され、地域と病院が手を取り合い患者ひとりひとりがその人らしく生活、療養していける環境を提供できるよう、関係部門と連携をより強化していきたいと考えております。
そのためには、看護職員が生き生きと活躍できる環境を提供して行く事が看護部にとって最も重要な課題であると考えます。新人・中堅・ベテラン看護師がそれぞれの力を発揮し、より良い看護を提供できるように看護部一丸となり取り組んで行きたいと考えております。

石巻赤十字病院看護支援について

看護師　**村井佐智代**

この度、平成28年６月１日～11月30日まで宮城県石巻市にある石巻赤十字病院に看護支援に行っていました。石巻市は人口約14万７千人と仙台の次に人口の多い町です。

石巻市は2011年３月の東日本大震災で大きな被害と共に多くの犠牲者を出してしまった地の一つです。５年経った今、沿岸部以外の町並みは震災の面影も無いほど復興しています。石巻赤十字病院は東日本大震災の際に、石巻市の拠点病院となり、多くの方々を救ってきました。総合病院であるため、内科や消化器内科等26の診療科があります。また、一般病棟をはじめ、ＩＣＵや救急病棟等、病床数も464床と充実した医療環境にあります。

私は呼吸器内科・消化器内科・糖尿病・第２種感染症病床のある病棟へ配属されました。当院は病床数も92床と赤十字の中でも小規模な病院です。新しい環境での生活や設備もルールも異なる環境で働くことに不安でいっぱいでしたが、周りの方々にも恵まれ、振り返るとあっという間の半年間でした。患者層としては主に肺癌やＣＯＰＤ、呼吸器疾患でターミナル期にある患者様、糖尿病の教育入院、ＥＳＤ目的、胆石胆のう炎等の患者様が多くいらっしゃいました。当院の入院されている患者様の疾患にも共通するものがあり、石巻での経験を今後は自部署でも活かしていけたらと思います。また、今後は看護管理システム等の見直しや糖尿病の方への指導方法を改善していきたいです。石巻でお世話になった方々への感謝を忘れず、努力していきたいと思います。

柏原赤十字病院看護支援について

看護係長　伊藤　奈美

この度、平成28年６月から８月までの三カ月間、赤十字病院間の看護支援に行って参りました。

柏原赤十字病院は兵庫県の北東部に位置する丹波市にあります。人口約67,000人、高齢化率30％であり清水町同様、人口減少と高齢化がすすんでいます。平成30年には県立柏原病院との統合再編により廃止が決定されている病院ですが、新病院などへの引き継ぎまで地域密着型の医療サービスを維持すべく、平成27年５月より「地域包括ケア病床(21床)」を開設しています。

地域包括ケア病床とは、急性期の治療が終わられた後、退院後の在宅療養・生活がスムーズに行えるようリハビリや在宅支援の準備を行う病床です。最長60日の入院期間が設けられ、多職種協働でのサポートとなるのですが、何より重要なのがご家族の理解と協力です。

入床時より退院を見据えての計画を立て、必要時必要メンバーが集まり意志確認や問題解決に向けての調整カンファレンスを重ねます。参加メンバーは本人・家族はもちろん医師・看護師・薬剤師・管理栄養士・リハビリスタッフ・医療ソーシャルワーカー・ケアマネージャー・訪問看護師・施設職員・福祉用具のメーカーとなります。この時、本人や家族の思いを尊重しなければせっかく立てた計画も自宅に戻ってから実行されなかったり、不安や不満が残ることでその後の介護プラン介入が困難となることもあり、相互関係を大切にした支援のあり方を学びました。

在宅療養に向けた家族指導も積極的で、食事介助の仕方やおむつの当て方、体位変換など生活上のケアをご家族にも習得していただきます。

この地域では同居世帯が多い為か、介護制度や用語に耳慣れたご家族が多い印象を持ちました。また関西圏の方は自分の意思をしっかりと持っている人が多く、70、80歳でも自分の今すべきことや目標をお話しする方にたくさん出会いました。ですから自らの介護(人生)プランを立てようと積極的に参加する傾向があるのかもしれません。

スタッフも患者さんも町の人も、とても明るく話し好き・世話好きな方が多くて温かい関わりをしていただきました。また他の病院を見ることで、当院の強みや弱みに気づくこともでき、とても貴重な派遣生活でした。

このような機会をいただき本当にありがとうございました。

看護師　牧野　美穂

９月から11月までの三ヶ月、兵庫県丹波市柏原にある柏原赤十字病院へ派遣されてきました。

残暑の残る９月の柏原は暑く、11月になっても天気がよければ上着のいらないほどで、道外の秋はこんなに長く暖かいのだなと思って帰ってきました。金木犀の香りやそこら中にある柿の木、柿の木、時々ミカンなど、北海道にはない秋を探すの楽しく、丹波といえば黒豆と栗が有名で、職員の方々におすそわけしていただきました。栗は北海道で見るものの３倍くらいの大きさで食べごたえがあり、黒豆も大粒で黒豆の枝豆は最高に美味しい秋の味覚でした。また、兵庫県と言えば竹田城跡と姫路城が観光地として有名で白鷺城とも呼ばれる姫路城は、白くその大きさに圧倒されました。竹田城跡は缶コーヒーのＢＯＳＳのＣＭで使われていた雲海が特徴ですが、早朝でないとみれないそうで軽く登山をし、てっぺんで殿様気分を味わってきました(笑)

柏原赤十字は99床と当院と同じ位の病床数で、私が配属された病棟は地域包括ケア病床を含む外科内科の混合病棟でした。地域包括対象の患者さんは60日以内に在宅や施設などへ帰られて行くため、毎日のように患者さんの家族や関係職種を交えたカンファレンスが行われ、退院されるまでの間にできるだけのリハビリ、自立支援が考えられ実施されています。柏原赤十字では退院後の訪問看護やテレビ電話を使用しての訪問もされており、地域と密着した看護が提供されていました。病棟のスタッフは快活で親しみやすく、優しく受け入れて下さいました。余談ですが方言である「(体が)こわい」「(ゴミを)投げる」はどんなに意識していてもポロッと出てしまい患者さんに不思議そうな顔をされた事もしばしばありました(笑)

今回関西という環境の違う場所で貴重な経験を積むことができ、自分を見つめ直す機会にもなりました。これを今後患者さんへの良い看護に活かしていけるよう努めていきたいです。

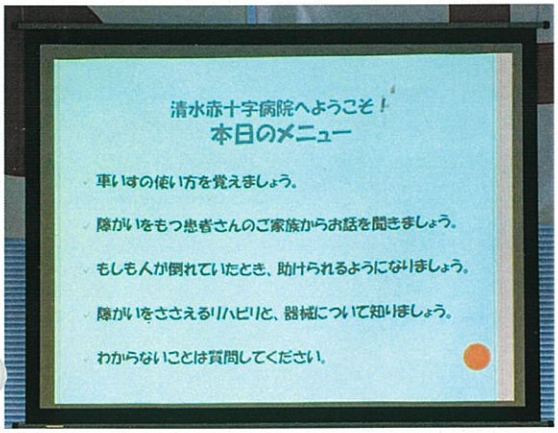
地域連携室だより「ちぃれん」

～清水小6年生への「ふくしの授業」について～

あけましておめでとうございます。第２回となる地域連携室だより「ちぃれん」。社会福祉や地域連携に関する活動をコラムとして紹介していきます。

今回は、昨年11月に行われた小学６年生への「ふくしの授業」についてご報告します。

きっかけは、清水小学校６年生を担当している先生から「福祉についての時間を１０コマ分用意するので、授業を開催してもらいたい」という一言。早速、町の福祉を支える事業所の担当者が一堂に会し〝６年生にどうすれば「福祉」のことをわかってもらえるだろうか〟と話し合いました。私たち医療者は「共生社会」の意味を知っています。身体・知的・精神・発達障がいなど、どんな障がいをもっていても共に支えあい、認め合い、地域の中でふつうに暮らせる社会です。でも、それがとても難しい。認知症高齢者の行動や障がい者の施設隔離・・・福祉が立ち向かうべき課題はたくさんあります。１人１人が正しく障がいを理解し、困っている人には手を差しのべられるようになってほしい。そんな思いから、当課としても「ふくしの授業」に協力させてもらうこととしました。



そして、昨年11月21日、町内の介護・医療機関４施設にそれぞれ児童がグループに分かれ実習を行いました。当院では会議室にて児童12名への授業を行いました。車いすの操作と体験実習では、車いすに乗っている人の目線、介助している人の気持ちを感じてもらうことが目的でした。スロープを上り下りする際、児童からは「声掛けされないと怖い」や「坂を登るって大変」などの声があがりました。

また、救急法の指導員である村谷課長、谷尻看護師長に、止血とＡＥＤの扱い方について講義をしていただきました。実際にケガをしている人や倒れている人がいたときにはどうすればいいのかという視点からの授業に児童たちは興味津々。とても思い出に残る授業になったようでした。その他、突然障がいをもつことになってしまった子を介護する親の気持ちを当事者にお話しいただいたり、リハビリの様子を見学したりと、あっという間の2時間でした。

地域の子どもたちが、地域にいる医療・福祉のプロフェッショナルから学ぶことができること、そして当院でその役割の一翼を担うことができたこと、皆さまのご協力に感謝いたします。

地域医療連携課　石井康浩

年男・年女

2階病棟　柏木知紗希（１９９３年生）

看護師になって３年目。昨年はプリセプターとして新卒さんの指導や熊本地震の看護師派遣、台風10号の時には救護班として避難所を回りました。たくさんの経験をさせてもらった１年でした。今年は昨年の経験を生かしながら、一生懸命働いていきたいと思います。患者様の事を第一に考え、優しく、寄り添った看護が提供できるように、日々勉学に励みたいです。

私事ですが、昨年末に結婚しました。周りの支えがあったからこそ、今幸せな生活を築けていると思います。今年は、たくさんの感謝を家族、友達、職場のみなさん、今まで関わってくれた方々に伝えていきたいと思います。今年も変わらず、柏木スマイルで日々過ごしていきたいと思います。

透析センター　中野　千笑（1969年）

透析センターで看護助手をしております中野です。

安心・安全・信頼をモットーに快適な時間を過ごしていただけるよう常に心がけております。何年たっても分からないことが多く、？マークが頭を横切ってしまい行動がフリーズしてしまい皆様には大変ご迷惑をお掛けしているかと思いますが、初心を忘れず助手業務を頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

医事課　小畠美由紀（1969年）

目標１「親しまれる小児科のおばちゃんになる。」

来院する子ども全員、自分の孫だと思って接しています。笑顔と声掛を心がけ、まずは顔を覚えてもらい町で会っても気軽に話をかけてもらえるようになりたいです。

目標２「180度開脚」

「どんなに体が硬い人でもベターっと開脚ができるようになるすごい方法」という本の基礎ストレッチを毎晩実践中です。ベターっとなるまで続け「怪我しない体」を目指します。

目標３「優良者講習」

今年、運転免許証の更新があり、初めての優良者講習が目前です。これからも安全運転に努めます！

これら３つの目標に向けて頑張りますのでこれからもよろしくお願いします。

人事消息

≪退職≫　お疲れ様でした

【平成28年12月31日付】看　護　師　曽我部理恵
【平成28年12月31日付】看　護　師　石川奈々恵

≪結婚≫　おめでとうございます

【平成28年11月28日】
看　護　師　柏木知紗希（旧姓／上野）
【平成28年12月８日】
看　護　師　斧木恵理奈（旧姓／槙）
【平成28年12月８日】
准看護師　斧木謙士郎

■話題・写真などを募集します！

院内報は1月・4月・7月・10月に発行する予定です。様々な話題や情報を発信していきたいと考えておりますので、職員の皆様から掲載したい話題や表紙となる写真がありましたら広報委員までお知らせください。

編集後記

平成28年度の広報誌発行は２回となってしまいました。

日常業務を行う一方で広報委員会の皆様には掲載記事の作成に協力いただき感謝しています。

昨年は熊本地震災害への職員派遣、更には石巻赤十字病院・柏原赤十字病院への看護師業務支援に加え９月に本町を襲った台風10号災害と例年になく各職員活躍の場があった年でもありました。

平成29年度の広報誌発行に向けて、新広報委員会スタッフを構成し病院親睦会からのアナウンスや各種イベント等の記事を盛りだくさんに発信していきたいと思います。

また、色々な方法を用いて赤十字活動、病院活動等を患者さんに分かりやすい形で広報できればと思います。院内報以外での情報発信があるかもしれませんので乞うご期待下さい・・・。KO

●編集・発行責任者：林　裕一　●発行元：清水赤十字病院　●印刷：勇昇印刷有限会社